

百人一首の秋の歌と定家との繋がり～選者の背景から考える～

国語班:成田 真優、嶋田 朱里

Abstract

The purpose of this study is to reveal the reason why there are so many autumn poems in Hyakunin Isshu, and the connection with Fujiwara no Teika, the editor. According to a survey, there are more poems by monks that express sadness and loneliness in autumn poems than in other seasons, and Fujiwara no Teika experienced a lot of loneliness. For these reasons, the sorrowful atmosphere of the autumn poems was connected to Teika's state of mind at the time, and there are many autumn poems in the Hyakunin Isshu.

要約

本研究の目的は、百人一首の中で秋の歌が多い理由と選者である藤原定家との繋がりを明らかにすることである。調査によって、秋の歌には他の季節に比べ、切なさや孤独を詠んだ僧の歌が多く、藤原定家は人生の中で孤独を多く経験していると考えられることから、秋の歌の持つ物寂しい雰囲気定家の当時の心境と繋がって、百人一首には秋の歌が多いのではないかと結論付けられた。

1. はじめに

たかが31字、されど31字。百人一首の世界に一度足を踏み入れると、何百年も前の日本にタイムスリップしたかのように感じられる。大昔に生きていた人のエピソードに現代を生きる私達が共感できる部分があることに驚き百人一首に興味をもった。また百人一首の歌を季節ごとに分けると、秋の歌が一番多いことを知り、百人一首は藤原定家によって選ばれたものなので、秋の歌が多い理由は定家の人生の背景と関係しているのではないかと考え、藤原定家と秋の歌との繋がりを調べた。

2. 研究方法

百人一首で秋の歌とされる歌の作者について、その人の当時の役職や定家との関係を本で調べる。また、百人一首の選者である藤原定家の性格や経歴、具体的なエピソードを伝記で調べる。

3. 結果

百人一首で秋の歌とされる歌は全部で20句あり、そのうちの35%が僧の詠んだものであった。これは他の季節や恋の歌に比べ、高い割合だった。僧について注目すると、百人一首に選ばれた合計12人の僧の中で秋の歌を詠んだ僧は、半分以上を越える7人だった。また、僧の詠む秋の歌は、比較的物悲しく、秋の寂寥感や切なさ、孤独を表現したものが多かった。藤原定家については、気難しい性格で、宮中でも嘲笑されたことが原因で人を殴ってしまうという問題をおこしており、二度も主人の死を経験していた。また百人一首の中には定家自身が詠い、選出しているものもあった。それが97番の「来ぬ人をまつほの浦の夕風に焼くや藻塩の身もこがれつつ」という歌だ。これは一般的に恋の歌として知られているが、百人一首の中の歌として、また自選歌として、五味文彦は、著書『藤原定家の時代—中世文化の空間—』でこの歌の「来ぬ人」は後鳥羽院を表しているのではないかと述べている。定家を和歌の世界で有名にしてくれた後鳥羽院が承久の乱の影響で隠岐に流されていたとき、定家は自分の家を「歌の家」として繁栄させるため後鳥羽院との関係を断ち、後鳥羽院が不遇な暮らしをしているなか、定家は順調に出世していったことから、来ぬ人を後鳥羽院として、「どんなに待っていても帰って来られない帝のことを思って身もこがれんばかりであります。」という定家の後鳥羽院の思いが表されているとされている。

4. 考察

秋の歌に僧が多い理由は、秋の気候的な面と僧の心情が関係しているからではないか。秋という季節には、冬に向けて日照時間が短くなっていき寒くなるという特徴がある。また僧が詠んだ歌から、僧は俗世間から離れ一人で暮らすため孤独な感情を多く感じているという特徴がある。秋のこのような気

候の特徴と僧の感情が繋がり、秋の歌に僧が多いのではないか。

次に藤原定家は、ろうそくで人を殴ってしまうという事件や、二度の主人の死から、孤独を多く感じていたのではないか。後鳥羽院との関係に関しては、「来ぬ人を～」という歌を自分で百人一首に選んだこと、後鳥羽院との関係を切ったのは自分の家を繁栄させるためである、という説から、後鳥羽院との関係を切ったことを後悔しているのではないかと推測した。

5. 結論

藤原定家は、気難しい性格から感じる孤独や二度の主人から感じる悲しみ、恩人である後鳥羽院への複雑な思いなどにより、様々な思いを抱えながら生きていたのではないか。そのため、俗世から離れ孤独を感じる僧の物悲しい雰囲気を中心とした秋の歌に共鳴し、多くの秋の歌を百人一首に選んだのではないか。

展望としては、定家と秋の歌の作者との関係性をより詳しく調べたり、他の季節の歌の特徴と比較してみると、秋の歌が多い理由を他にも明らかにすることができるのではないかと思った。

6. 参考文献ならびに参考Webページ

五味文彦著(1991)『藤原定家の時代—中世文化の空間—』岩波新書

林直道著(1981)『百人一首の秘密』青木書店

吉海 直人著(2006)『百人一首大辞典』あかね書房